

挑戦こそ人生を輝かせる

広島県立広島中央特別支援学校

高等部第1学年 湯浅 修治

挑戦こそ人生を輝かせる

広島県立広島中央特別支援学校 高等部普通科 一年 湯浅 修治

「もし仮に治療で視力が回復するとしても、私は決してその治療を受けないだろう。」

この言葉を聞けば、誰もが耳を疑うのではないだろうか。これは、ブラインドセーラーの岩本光弘さんの著書、「見えないからこそ見えた光」の中にある言葉である。

岩本さんは生まれつき視覚障害をもち、盲学校に通っていた。しかし、学年が上がるにつれ、視力が低下していった。視力の低下により、今まで問題なくこなせていた日常生活が困難になっていき、自分の無力さ、やるせなさなどに押しつぶされそうになっていた。そんな時、岩本さんは自分がこの世界に生きていることに意味はないと考え、自ら命を絶とうとした。しかし、いざ命を絶とうとなると、とてもできず、そのまま疲れ果てて公園のベンチで眠ってしまったという。その時、亡き祖父の声が聞こえてきた。

「絶対に命を無駄にしてはならない。お前が視覚障害をもったのには必ず意味がある。」と。

それから岩本さんは、とりあえず命を絶とうとするのはやめようと考えたそう。しかし、十六歳の時、とうとう失明してしまった。そんな中でも自分の意志を貫き、何事にも挑戦していったそう。

このような少年時代を送った岩本さん。この姿が、何だか自分と重なる部分があるなと感じた。

私自身も視覚障害をもち、視力の低下に苦しめられた。小学校の途中から、視力が低下してきて徐々に普通校でも学習が困難になっていき、始めは拡大レンズを活用しながら学習をしていたが、さらに視力が低下し、レンズを活用するのが困難になっていき、拡大読書器に移行した。しかしさらに視力が低下し、拡大読書器でさえ学習が困難になっていった。そこで次は、点字に切り替える決断をした。ここまで、何度も視力の低下に苦しめられ、そのつど学習に使う補助具も変化し、あまりの苦しさに涙を流すこともあった。それらを習得すること自体も容易ではなく、とても苦労した。ただ、それらの困難を乗り越えることで、今の私があると思う。

しかし、私は岩本さんのように視覚障害者として生き続ける覚悟があるかと言われると、そうではないと思う。治療で視力が回復するのならば、私はすぐにでもその治療を受けたいと思うだろうし、視力がある方が、生きている上でずっと良いと思っているからである。

だが、岩本さんの考えを読んで私の考えは少し変わったような気がする。岩本さんは、視覚障害をもち、普通に生きていても経験できないことをいくつも経験できると言う。例えば、白杖や点字などとの出会い、また、自身が障害者であるからこそ、障害についても深く考えることができるとも言う。確かに自分自身が視覚障害をもちていなければ、当然点字や白杖などの視覚障害用具と出会うことも、障害者について深く考えることもなかっただろう。確かにこれは、視覚障害をもちているからこそできる貴重な体験なのかもしれない。それでも、岩本さんのように視覚障害者として生きる覚悟は、なかなかはっきりとはもてない。だからこそ、岩本さんは本当にすごいと思う。

岩本さんは、こうも語っている。

「挑戦をせずに後悔することほど悔やまれるものはない。」

これは、岩本さん自身の経験からの言葉だ。挑戦をして失敗したとしても必ずその失敗は役に立つ。しかし、挑戦をせずに後悔しても、何も得られない。つまり、どんなことにも挑戦することが大切であると、岩本さんは繰り返し述べている。

私は、今まで失敗を恐れて挑戦できていなかった。自分自身で視覚障害があるからできないと決めつけ、そもそも挑戦をしようとしていなかった。しかし、岩本さんは視覚障害があっても、海外留学をしたり、ヨットで海を渡ったり、自分が不可能だと思っていたことを数々成し遂げていた。そんな岩本さんの姿を見て、私も少しずつでもチャンスがあれば挑戦してみようと思った。

私は、この本を読んで、私と同じ視覚障害をもちながらも、たくましく人生を楽しんで社会で生きている岩本さんの考えに触れることができた。そして、視覚障害をもつことで得られた経験や出会いを大事にしながら、何事も失敗を恐れず挑戦していくことの重要性を学んだ。この本は、私の考え方を広げ、一つの生き方を示してくれた。私も、岩本さんに少しでも近づけるように積極的に挑戦をし、人生を楽しめるような人間になりたいと思う。

岩本光弘「見えないからこそ見えた光 絶望を希望に変える生き方」(ユサブル)

＜指導者の言葉＞

本作品は、「国語総合」の夏休みの課題として作成した作品であり、夏休み前に学部で「お気に入りの本」の発表会が実施され、そこで発表した本、『見えないからこそ見えた光 絶望を希望に変える生き方』についての読書感想文です。書くにあたり、単なる感想を書くのではなく、

- ① 本を通して気付いた自分自身のこと。
- ② 本を通して考えた自分と周囲、社会とのつながり。

などを意識して書くように指導を行いました。

夏休み明け、推敲するにあたり、生徒には視覚障害があり点字使用であるため、自分で推敲しやすいよう、使い始めたばかりの音声パソコンを活用し、「May word」を使って記述し直していきました。推敲当初は、抽象的、一般論的な記述が目立つ文章でした。そこで、

- ① 自分のことをもっと具体的に書く。
- ② 共感ばかりでなく、筆者と自分の違いや、筆者への疑問も素直に書く。
- ③ 本を読む前と読んだ後で自分の内面に変化がないか、自分を見つめて書く。

という点を意識し、言語化して加筆するよう促しました。

生徒は、アドバイスをもとに加筆し、パソコンが読み上げる自身の文章を、繰り返し聞いて言葉を吟味し、推敲を進めていきました。この推敲の過程において、生徒は再度自分を見つめ、視力を失っていく不安と将来への不安、そんな中で前向きになれない自分を素直に認め、言語化することができました。また、自分がどのような生き方をしたいかについても、言葉にして再確認することができました。

筆者の考え方に触れ、自分自身を見つめ直したできごとを綴ることで、出会った本を通して自分のあり方や生き方を見つめるという読書の意義をも伝えてくれる感想文となりました。